

## ニコロ・デッラバーテ《クピドとプシュケ》 — 物語場面の解釈をめぐって —

町野 陽輝（東京藝術大学）

ニコロ・デッラバーテ（1509-1571）によるフランス時代の油彩画《クピドとプシュケ》（デトロイト美術研究所）は、16世紀のプシュケ主題絵画としては、寝台で若い男女が語り合う珍しい場面を描いた作例である。この構図は、フランチェスコ・プリマティッチョの下絵に基づき、ニコロ自身が実制作を担ったフォンテーヌブロー宮殿の「オデュッセウスのギャラリー」から直接引用されたものである。英雄オデュッセウスの冒険譚を表した同ギャラリーは、画家が1552年の渡仏後に手がけた共同制作のなかでも最大規模を誇り、同時代から広く賞賛されていたが、1739年に取り壊された。それゆえ本作は、主題は異なるものの、失われた有名作品の派生絵画として、あるいはニコロからプリマティッチョへのオマージュとして、多くの研究者によって言及されてきた。

しかし、その物語場面の同定にはいくつかの異論がある。シルヴィ・ベガン（1972）は、プシュケ神話の典拠たるアプレイウスの記述と本作が描く状況との不一致から女性をウェヌスとし、以降の解釈の方向性をプシュケ説とウェヌス説に二分した。プシュケ説を主張する研究者たちは主に男女の若い相貌を根拠としたが、本作の物語上の位置付けについては沈黙し、他方でソニア・カヴィッキオーリのプシュケ図像研究（2002）では、恋人たちがプシュケの姉たちの訪問について話す場面と見做されている。こうした解釈の不一致の要因には、プリマティッチョの構図の引用を意識するあまり、図像学的考察や典拠テキストの検討が不十分であったことが考えられる。

そこで発表者は、視覚的着想源ないし文学的典拠として、ミヒール・コクシーの原画に基づいた俗語八行詩を伴う銅版画連作〈プシュケの寓話〉およびそのフランスにおける派生作品との関連性を新たに示し、本作がその最終場面を念頭に置いた可能性を指摘したい。1532年頃のローマで出版された同連作のフランスでの受容を跡付けると、宮廷に出入りした画家と注文主層の人々がその一連のイメージと詩文に親しんでいたことに疑いの余地はない。そして、試練の末にプシュケとクピドが再び結ばれる連作中最後の場面と詩文に照らせば、ニコロ作品はまさにこの最終場面を喚起したと考えられる。

この主題解釈からプリマティッチョの構図を踏襲した経緯を再考するなら、プシュケの寓話とオデュッセウスの物語との内容的な重なり合いが見えてくる。ニコロ作品が構図を借用した絵画は、オデュッセウスのギャラリーのなかでも、祖国に帰還したオデュッセウスが妻ペネロペイアと長きにわたる彷徨について語らう様子を表した物語終盤の重要場面であった。同ギャラリーを訪問した人なら必ず記憶していたであろうこの場面を転用することで、ニコロは当該場面がもつ再会と会話の喜びを複製し、プシュケ寓話の最終場面を、いっそう幸せに富む一幕へ昇華させていたのである。